

心中天の網島

近松門左衛門

上之巻

歌

さん上ばつからふんころのころ、ちよつ
ころふんころで、まてとつころわつからゆつくる

語

くくく、たがかさをわんがらんがらす。そらが
くんぐるくも、れんげれんげればつからふんころ
り 妓が情の底深き、是から戀の大海を、替へ
も干されぬ蜷川。思ひ思ひの思ひうた、心がころ
留むるは門行燈の文字が關。浮れぞめきしあだ淨瑠
璃、役者物眞似なやは歌、二階座敷の三味線に、ひ
かれて立よる客も有、紋日遁れて顔隠し、仕過しせ
じと忍び風。仲居のきよが是を見て、

謡

い 三保の谷が著たりる、

語

り 頭巾の鍔を取外しく、二三度延延たれ共
思ふおてきなれば

き

よ 遁さじ、

語

り と飛懸りひつたり悪洒落。ごんせ、と止た
る女景清鍔と頭巾、ついふみかぶる客も有。橋の名
さへも梅櫻、花を揃へし其中に、南の風臣の浴衣よ
り、今此新地に戀衣、紀の國やの小春とは此十月に
仇し名を世に残せとのしるしかや。今宵は誰か呼子
鳥、覺束なくも行燈の影、ゆき違ふ妓の立歸、

妓

ヤ小春様が何といの。互ひに一座も打絶へ、
貴面ならねば便りも聞ず。氣色がわるいか顔も細り
やつれさんした。誰やらが咄して聞けば紙治様故。
内からたんと客の吟味にあはんして、何處へもむさ
と送らぬの、いや太兵衛様に請出され、在所とやら
伊丹とやらへ往かんすはづ共聞及ぶ。どふで御座り
やす

語

り と云ければ、

小

ア、もふ伊丹くといふて下んすな。夫で
いたみ入はいな。いとしばなげに紙治様とわたしが
中、左程にもない事を、あの贅こぎの太兵衛が浮名
を立て云散し、客と云客は退果、内からは紙屋治兵
衛故じやとせく程にく、文の便りも叶はぬ様に成
やした。不思議に今宵は武士衆とて河庄方へ送らる
るが、かふ往く道でも若し太兵衛めに逢ふかと、氣
遣さく。敵持同前の身持。なんとそこらに見へぬ
かゑ

妓

ヲ、くそんならちやつと外さんせ。あれ
一丁目からなまいだ坊主が、てんがう念佛申て来る。
其見物の中に、のんこに髪結ふて野良らしい、たて衆
自慢と云そな男、慥に太兵衛様かと見た。あれく
爰へ

語

り と、いふ間程なくほつろく頭巾の青道心、
墨の衣の玉襷、見物ぞめきに取巻れ、鉦の拍子も出
合こんく、ほでてんくご念佛に仇口囁交て、

道

具屋 樊会流は珍らしからず、門を破るは日本の
朝比奈流を見よやとて、貫木逆茂木引破り、右龍虎
左龍虎討取て、難なく過る月日の關や。なまみだなま
いだく。文彌迷ひ行共松山に、似たる人な
き浮世ぞと、泣つエ、くワハく。笑ふつ
狂亂の身の果何と淺ましやと、芝を褥に伏けるは眼
も當られぬ風情。なまみだなまいだく。歌
糸いく。紺屋の徳兵衛、房にもと
より濃み染込の、内の身代灰汁でもはげず。なまみ
だなまいだく。

妓

ア、是坊様なんぞ、エ、忌々しい。漸此比
此さとの心中沙汰が鎮つたに、夫をいて國性爺の道
行念佛が所望じや

語

り と、杉が袖から報謝の錢。

江戸

坊

主 只た一錢二錢で三千余里を隔てたる、大明
國への長旅は、あはぬだ佛あはぬだく。

語

り ぶつく、いふて行過る。

坊

主 人立紛れにちよく走、とつ河内屋に駈
込ば、

妓

是はく早いお出。お名さへ久しう云なん
だ。やれ珍らしい小春様く、はるくで小春様

語

り と主の花車が勇む聲。

小

是門へ聞へる、高い聲して小春くと云ふ
て下んすな。表に嫌な李踏天が居るはいの。密かに
密かに頼みやす

語

り と、いふも洩てやぬつと入たる三人連。

太 小春殿李蹈天とはない名を付て下された。先禮からいひまじよ。連衆、内く咄した、心中よし意氣方よし床よしの小春殿、やがて此男が女房に持か、紙屋治兵衛が請出すか、張合の女郎。近付に成て置や

語 り とのさばりよれば、

小 エイ聞共ない。得知れぬ人の仇名立、手柄にならば精出してはんせ。此小春は聞ともない

語 り と、ついと退けば又摺寄、

太 聞共なく共小判の響で聞せて見せふ。貴様もよい因果じや。天満大坂三郷に男も多いに、紙屋の治兵衛二人の子の親、女房は従弟同士舅は伯母舅。六十日く問屋の仕切にさへ迫るる商賣、十貫目近い金出して請出すの根引のとは、蟻螂が斧で御座る。我ら女房子なれば、舅なし親もなし伯父持ず、身すがらの太兵衛と名をとつた男。色ざとで潜上いふ事は治兵衛めには叶はね共、金持た計は太兵衛が勝た。金の力で押たらば、なふ連衆、何に勝ふも知れまい。今宵の客も治兵衛奴じや。もらをく、此身すがらもらふた。花車酒出しや

小 工何おしやんす。今宵のお客はお侍衆、をつ付見へまじよ。お前は何處ぞ他で遊んで下さんせ

語 り と、いへ共ほたへた顔付にて、

太 ハテ刀指か指ぬか侍も町人も客は客。なんぼ指ても五本六本は指まいし、よふ指て刀脇指たつた二本。侍ぐるめに小春殿もらふた。抜つ隠れつなされても縁あればこそお出合申。なまいだ坊主のお蔭、ア、念佛の功力有がたい。こちも念佛申そ。ヤ鉦の火入煙管撞木面白。ちやんくちやんちやん歌えいゑいくくく、紙屋の治兵衛、小春

狂ひが杉原紙で、一分小判紙ちりく紙で、内の身代漉破紙の、鼻もかまれぬ、紙屑治兵衛。工なまみだ佛なまいだ、なまみだ佛なまいだくく

語 り と、暴れ叫く門の口、人目を忍ぶ夜の編笠。

太 ハア、塵紙わせた。ハテきつい忍びやう、なぜ這入ぬ塵紙。大兵衛が念佛こはくば南無編笠もらふた

語 り と、引ずり入たる姿を見れば、大小くすんだ武士の正眞。編笠越にくつと睨たる、まん丸眼玉は敲鉦、念共佛共出ばこそ、ハア、といへどもひるまぬ顔。

太 なふ小春殿こちは町人刀指いた事はなければ、己が所に澤山な新銀の光には、少々の刀も捻曲めふと思ふ物。塵紙屋奴めが漆漉程な薄元手で、此身すがらと張合は慮外千万。櫻橋から中町下りぞめいたら、どこぞでは紙屑蹂躪つてくりよ。皆おじや

語 り と身振計は男を磨く、町一ぱいにはばかつてこそ歸りけれ。所柄馬鹿者に構はず堪る武士の客、紙屋く善惡の噂小春が身に應へ、思ひくづおれ恍惚と無挨拶なる折節、内から走つて紀國屋の、杉がけうとい顔付にて、

杉 只今春様送つて参りし時、お客様まだ見へず、なぜ見届けて來なんだ、とひどく叱られます。慮様外ながら一寸

語 り と、編笠をしあげ面鉢吟味、

杉 ム、そでないく氣遣なし。跡詰てしつぱりと小春様、したたる樽の生醬油。花車様さらば、後に青菜の浸し物

語 り と、口合たらく立歸る。至極かた手の侍大きに無興し、

侍 こりや何じや、人の面を自利するは、身を茶入茶碗にするか。嫩れには來申さぬ。此方の屋敷は晝さへ出入かたく、一夜の他出も留守居へ斷り帳に付、むつか敷掟なれ共、お名聞て戀慕ふお女郎。どふぞと一座を願ひ、子者も連す先刻参つて宿を頼み、何でも一生の思ひ出、お情けに預らふと存じたに、いかなにつこりと笑顔も見せず、一言の挨拶もなく、懷中で錢よむやうに切々俯いて計。首筋が痛は致さぬか。何と花車殿、茶屋へ來て産所の夜伽する事は、ついにないづ

語 り とぶつつけば、

花車 お道理く。いはくをこ存しない故御不審の立はつ。此女郎には、紙治様と申深いお客がござんして、今日も紙治様明日も紙治様と、わかから手指もならず。外のお客は風の木の葉でばらく。登り詰てはお客にも、女郎にも多て怪我の有物、第一勤の妨と、せくは何處しも親方のならひ。夫故のお客の吟味。自然と小春様もお氣の浮ぬは道理、お客も道理、道理々々の中取て、主の身なれば御機嫌よかれ、道理の肝腎肝もん。サアはつと吞かけわさくわつさり頼ます。小春様はる様

語 り と、いへ共何の返答も涙ほろりの顔ふり上、あのお侍様同じ死ぬる道にも十夜の内に死んだ者は、佛に成と云ひますが、定かいな

侍 夫を身が知る事か、檀那坊主にお問なされ

小 ほんにそふじや。そんなら問たい事有、自害すると首くるとは、さだめし此喉を切かたが、たと痛いでござんしよの

侍 痛むか痛まぬか切ては見ず。大かたの事問
ばつしやれ。ア小氣味の悪い女郎じや

語 り と、流石の武士もつてぬ顔。

花車 エ、春様、初対面のお客にあんまりな挨拶、
少と氣をかへどりやこちの人尋て来て酒にせふ

語 り と、立出る門は宵月の、影傾ぶきて雲のあ
し、人足薄く成にけり。天満に年ふる千早振る、神
にはあらぬ、紙様と世の鯉口にのる計。小春に深く
大幣の、腐り合たる御注連繩。舞今は結ぶの神無月、
せかれて逢れぬ身と成果、あはれ逢瀬の首尾あらば、
夫を二人が最期日と、名残の文の云かはし、毎夜々々
の死覺悟、玉しひ抜けてとぼくうかうか身を焦
す。煮賣屋で小春が沙汰、侍客で河庄方と、耳に入
るより、

治 サア今宵

語 り と、覗く格子の奥の間に、客は頭巾を頭の、
いごく計に聲聞へず。可愛や小春が燈に、背向した顔
のあの瘦た事はい。心の中は皆己がごと。爰に居る
と吹込で、連て飛なら梅田が北野か、エ、知らせたい
呼たいと、心で招く氣は先へ、身は空蟬の脱殻の、
格子に抱付あせり泣。奥の客が大欠

侍 思ひの有女郎衆の御伽で氣がめいる。門も
静な、端の間へ出て、行燈でも見て氣を晴そふ。サ
アござれ

語 り と連立出れば、

治 南無三寶と、格子の小陰に片身をすほめ、
隠れて聞共内にはしらす、

侍 なふ小春殿 宵からの素振詞の端に氣を付
れば、花車が咄しの紙治とやらと心中する心と見た、
違ふまい。死神付た耳へは、異見も道理も入るまじ

とは思へ共、去とは愚痴のいたり。先の男の無分別
は恨ず、一家一門そなたを恨み憎しみ、萬人に死顔
晒す身の恥。親は無かも知らね共、若しあれば不孝
の罰、佛は愚地獄へも暖かに、一人連では墮られぬ。
痛はし共笑止共、一見ながら武士の役、見殺しには
成がたし、定て金づく、五兩十兩は用に立ても助け
たし。しん八幡侍冥利他言せまじ、心底残さず打あ
けや

語 り と、ささやけば手を合せ、

小 ア、忝い有がたい。馴染よしみもない私、御
誓言での情のお詞、涙がこぼれて忝い。ほんに色外
に顯るでござんする。如何にもく紙治様と死ぬる
約束。親方にせかれて達せも絶へ、指合有て今急に
請出す事も叶はず。南のもの親方と爰とにまだ五
年有年の中、人手に取れては私はもとより主は猶
一分立ず。いつそ死でくれぬか。ア、死にまじよと
引にひかれぬ義理詰に、ふつと云交し、首尾を見合
せ合圖を定め、抜て出よふ抜て出よ、といつ何時を
最期共、其日送りの敢ない命。私一人を頼みの母様、
南邊に賃仕事して裏家住。死んだ跡では袖乞非人の
飢死もなされふか、と是のみ悲さ。私とても命は一
つ、水臭い女と思召も恥かしながら、其恥を捨て死
ともないが第一。死なずに事の濟む様にござん
頼みやす

語 り と、語れば頷く思案兒。外にははつと聞驚
く、思ひがけなき男心、木から落たる如くにて氣も
せき狂ひ、

治 扱は皆嘘か。エ、腹の立。二年といふ物化
された。根生腐りの狐め踏込で一討か、面恥かかせ
て腹ぬよか

語 り と、齒切りくく口惜涙。内に小春がかこ

小 ち泣、

卑怯な頼み事ながら、お侍様のお情、今年
中來春三月の比迄、私に逢ふて下んして、彼の男
の死に來る度毎に、邪魔に成て期を延しくをの
づから手を切ば、先も殺さずわたしも命助かる。何
の因果に死ぬる契約した事ぞ。思へばくやしうござ
んす

語 り と、膝にもたれ泣く有様。

侍 ム、聞届けた思案有。風も來る人や見る

語 り と、格子の障子ばたくと、立聞治兵衛が
氣も狂亂。

治 エ、さすが賣物め。ど性骨見違へ玉しひを
奪はれし巾著切め。切ふか突ふかどふ

語 り 障子にうつる二人の横兒。

治 エ、くらはせたい踏たい。何ぬかすやら頷
き合、拜むささやくほへるさま、胸を押へさすつて
も堪へられぬ堪忍ならぬ。

語 り 心もせきに關の孫六一尺七寸抜放し、格子
の挟間より小春が脇腹、爰ぞと見極め、えいと突に
座は遠く、是はと計怪我もなく、すかさず客が飛か
かり、兩手を掴んでぐつと引入、刀の下緒手ばしか
く、格子の柱にがんじがらみ、しつかと締付、

侍 小春騒ぐな覗くまいぞ

語 り と、いふ所に亭主夫婦立歸り、是はと騒げば、

侍 ア、苦つない。障子越に抜身を突込暴れ者、
腕を障子に括り置く。思案あり繩解な。人立あれば
所の騒ぎ。サア皆奥へ。小春おじゃ往で寐よふ

小 あい

語 り とはいへど見知り有脇指の、つかれぬ胸にはつと貫き、

小 酔狂の餘り色里には有習ひ。沙汰なしに往なして遣らんしたら、ナア河庄さん私やよさそふに思ひやす

侍 いかなく身次第にして皆はひりや。小春こちへ

語 り と奥の間の、影は見ゆれど縛られて、格子手がせに悶搔ば締り、身は煩惱に繋るる犬に劣つた生恥を、覺悟極めし血の涙、しほり泣こそ不便なれ。ぞめき戻りの身すがら太兵衛、

太 扱こそ河庄が格子に立たは治兵衛めな。投てくれん

語 り と襟かい攫で引擔ぐ。
治 あ痛たた

太 あいたとは卑怯者。ヤアこりや縛付られた。扱は盜ほざいたな。ヤいき掏摸めどう掏摸め

語 り とては、はたとくらはせ、

太 ヤ強盜めや獄門め

語 り とては蹴飛ばし、

太 紙屋治兵衛盜して縛られた

語 り と、呼わり叫けば行かふ人、あたり近所も駈集まる。内より侍飛で出、

侍 盗人呼りはをのれか。治兵衛が何盗んだ。サア吐せ

語 り と、太兵衛をかい掴み、土にぎやつとのめらせ、起れば踏付踏のめし、引捕て

侍 サア治兵衛踏で腹るよ

語 り と、足元に突付るを縛れながら頬がまち踏付、踏さがされて土塗れ、立上て睨まはし、

太 四邊の奴原よふ見物して踏せたナア。一々に面見覺た、返報する覺えておれ

語 り と、滅す口にて逃出す。立寄人々どつと笑ひ、人々踏れてもあの頤。橋から投て水食はせ。遣なく

語 り と追駈行。人立すけば、侍立寄て縛めとき、頭巾取たる面躰、

治 ヤア孫右衛門殿兄者人。
アツア面目なやとどうと座し、土にひれ伏泣ある。

治 扱は兄御様かいの

語 り と、走り出る小春が胸ぐら取て引居へ、

治 畜生め狐め、太兵衛より先うぬを踏たい

語 り と、足を上れば孫右衛門、
孫 ヤイ、其たはけから事起る。人を

たらずは遊女の商賣、今日に見へたか。此孫右衛門はたつた今一見にて女の心の底を見る。二年余りの名染の女、心底見付ぬ狼狽者。小春を踏足で狼狽たをのれが根生をなげ踏ぬ。エ、是非もなや。弟とは云ながら三十に追掛り、勘太郎おすといふ六ツと四ツの子の親。六間口の家踏しめ、身代漬るる辨なく、兄の異見を請ることか、舅は伯母舅、姑は伯母じや人親同然。女房おさんは我爲にも従弟。結合々々重々の縁者親子中、一家一門參會にも、をのれが曾根崎通ひの悔みより外、餘の事は何も無い。最愛は伯母者人、連合五左衛門殿はにべもない昔人。鼻の甥子に倒され娘を捨てた。おさんを取返し、天満中に恥かかせんとの腹立。伯母一人の氣扱ひ、敵に成味

方に成、病に成程心を苦しめ、をのれが恥を包まるる恩しらず、此罰たつた一ツでも、行先に的が立。斯ては家も立まじ。小春が心底見届け、其上の一思案、

伯母の心も安めたく、此亭主に工面し、をのれが病の根元見届くる。女房子にも見かへしは尤。心中よしの女郎、ア、お手柄。結構な弟を持、人にも知られし粉やの孫右衛門、祭の練衆が氣違かつるに指ぬ大小ぼつこみ、藏屋敷の役人と、小詰役者の眞似をして、痴を盡した此刀、捨所がないはいや。小腹が立やらおかしいやら、胸が痛い

語 り と齒ぎしみし、泣顔かくす十面に、小春は始終むせ返り、

小 皆お道理

語 り と計にて、詞も涙にくれにけり。大地を叩て治兵衛、

治 誤つた、兄者人。三年前よりあの古狸に見入れ、親子一門妻子迄そでになし、身代の手縛れも、小春と云ふ屋尻切にたらされ後悔千万。ふつつり心残らねば、尤足も踏込まじ。ヤイ狸め狐め屋尻切め、思ひ切た證據は見よ

語 り と、肌懸たる守袋、

治 月頭に一枚づつ取交したる起請合せて廿九枚、戻せば戀も情もない。こりや請取

語 り とはたと打付、

治 兄者人、彼奴が方の我等が起請數改め請取て、此方の方で火にくべて下され。サア兄きへ渡せ

小 心へやした

語 り と涙ながら、投出す守袋孫右衛門押開き、

孫 ひいふうみいよ廿九枚數揃ふ。外に通女の文。是や何じや

語 り と聞く所を、

小 ア、そりや見せられぬ大事の文

語 り と、取付を押退け、行燈にて上書見れば、小春様参る、紙屋内さんより讀も果すさあらぬ顔にて懷中し、

孫 是小春、最前は侍冥利今は粉やの孫右衛門商ひ冥利、女房限つて此文見せず、我一人披見して起請共に火に入る。誓文に違はない

小 ア、忝い。夫で私が立ます

語 り と又伏しつめば、

治 ハア／＼ハアうぬが立の立ぬとは人がましい。是兄者人、片時も彼奴が面見ともなし。いざ御座れ。去ながら此無念口惜さどふもたまらぬ。今生の思ひ出、女が面一ツ踏。御免あれ

語 り と、つつと寄て地團太踏、

治 エ、／＼、しなしたり。足かけ三年戀し床しも最愛可愛も、今日といふ今日、たつた此足一本の暇乞

語 り と額ぎはをはつたと蹴て、わつと泣出し兄弟つれ歸る姿もいた／＼敷、跡を見送り聲を上、歎く小春も酷らしき、無心中か心中か、誠の心は女房の、其一筆の奥深く、誰が文も見ぬ戀の道、別れてこそは

三重歸りけれ。

中之巻

語 り 福徳に天満神の名を直に、天神橋と行通ふ、所も神のお前町、營む業も紙店に、紙屋治兵衛と名を付て、千早振程買に来る、かみは正直商賣は、所がらなり老舗なり。夫が火燵に轉寐を、枕屏風で風ふせぐ、外は十夜の人通り、見世と内とを一締に、女房おさんの心配り。

語 り と獨言、

勸 母様一人戻つた

語 り と、走り歸る兄息子。

語 り と、何とした

勸 宮に遊んで乳呑たいと、お末のたんと泣やりました

語 り と、待兼見世に駈出れば、三五郎只一人のらく／＼として立歸る。

語 り と、こりや手も足も釘になつた。父様の寐て御座る火燵へあたつて暖まりや。此阿房めどふせふ

語 り と、何處ぞ尋て来ませふか

語 り と、叫く所へ下女の玉、お末を背なかに、

語 り と、お末を背なかに、

語 り と、お末を背なかに、

語 り と、お末を背なかに、

玉 おふ／＼最愛や辻に泣て御座んした。三五郎守するならるくにしや

語 り と、わめき歸れば、

語 り と、同じ火燵に添乳して、

語 り と、いへば三五郎がぶりぶり、

語 り と、お宮で蜜柑を二つつ

語 り と、阿房の癖に軽口だて、苦笑いする計なり。

語 り と、阿房にかかつて忘りよとした。申々おさん様。西の方から粉屋の孫右衛門様と、伯母御様連立てお出なされます

語 り と、おつとませ

語 り とむつくと起き、算盤片手に帳引寄せ、

語 り と、二天作の五、九進が三進、六進が二進、七八五十六

語 り と、成伯母打連て、孫右衛門内に入は、

語 り と、先これへ。私は只今急な算用いたしかかり。四九三十六

語 り と、煙草盆持ておじや。一三が三、夫

語 り と、おさんお茶上まじや

語 り と、おさんお茶上まじや

語 り と、おさんお茶上まじや

語 り と、おさんお茶上まじや

語 り と、おさんお茶上まじや

語 り と、おさんお茶上まじや

語 り と、おさんお茶上まじや

語 り と、おさんお茶上まじや

伯 母 いや〜茶も煙草も吞には來ぬ。是おさん、いかに若いとて二人の子の親。結構な計みめてはない。男の性の悪いは皆女房の油斷から。身代破り女夫別れる時は、男ばかりの恥じやない。ちと目をあいて氣にはりを持やいの

の一言は忘れねど、そなたの心一ツにて、頼まれしかひもないはいの

伯 母 ヲ尤々此氣に成は堅まる。商事も繁昌しよ。一門中が世話かくも皆治兵衛爲よかれ、兄弟の孫共可愛さ。孫右衛門おじや、早ふ歸つて親父に安堵させたい。世間がひへる子共に風ひかしやんな。是も十夜の如來のお蔭。是から成共お禮念佛、南無阿彌陀佛

孫 語 伯母様愚なこと。此兄をさへ欺す不覺悟者、女房の異見など暖かに。ヤイ治兵衛、此孫右衛門をぬく〜と欺し、起請迄かやして見せ、十日も立ぬになんじや請出す。エ、うぬはなあ小春が借錢の算用か置をれ

語 伯母様愚なこと。此兄をさへ欺す不覺悟者、女房の異見など暖かに。ヤイ治兵衛、此孫右衛門をぬく〜と欺し、起請迄かやして見せ、十日も立ぬになんじや請出す。エ、うぬはなあ小春が借錢の算用か置をれ

語 伯母様愚なこと。此兄をさへ欺す不覺悟者、女房の異見など暖かに。ヤイ治兵衛、此孫右衛門をぬく〜と欺し、起請迄かやして見せ、十日も立ぬになんじや請出す。エ、うぬはなあ小春が借錢の算用か置をれ

治 語 是は近比迷惑千万。先度より後、今橋の問屋へ二度、天神様へ一度ならではしきより外出ぬ私。請出す事は切實、思ひ出しも出すにこそ

語 是は近比迷惑千万。先度より後、今橋の問屋へ二度、天神様へ一度ならではしきより外出ぬ私。請出す事は切實、思ひ出しも出すにこそ

語 是は近比迷惑千万。先度より後、今橋の問屋へ二度、天神様へ一度ならではしきより外出ぬ私。請出す事は切實、思ひ出しも出すにこそ

伯 母 いやんな云やんな。夕部十夜の念佛に講中の物語、曾根崎の茶屋紀の國屋の小春といふ白人に、天満の深い大じんが外の客を追退、直に其大臣が今日明日に請出すとの沙汰。賣買高い世の中でも、金とたはけは澤山なといろ〜の評判。こちの親父御左衛門殿常々名を聞ぬいて、紀の國屋の小春に天満の大じんとは治兵衛めに極つた。噂の爲には甥なれど、こちは他人、娘が大事。茶屋者請出し女房は茶屋へ賣をらふ。著類著そげに疵付られぬ間に取返してくれふと、沓脱半分下りられしを、そつ〜しい神妙にも成ことを、明さ暗さ聞届て上のことと押宥め、此孫右衛門同道した。孫右衛門の咄しには今日昨日の治兵衛でない。曾根崎の手も切れ本人間の上々と、聞ば跡からはみかへる、そもいかなる病ぞや。そなたの父御は伯母が兄、最愛や光譽だうせい往生の枕を上、一簪なり甥なり、治兵衛が事頼むと

伯 母 いやんな云やんな。夕部十夜の念佛に講中の物語、曾根崎の茶屋紀の國屋の小春といふ白人に、天満の深い大じんが外の客を追退、直に其大臣が今日明日に請出すとの沙汰。賣買高い世の中でも、金とたはけは澤山なといろ〜の評判。こちの親父御左衛門殿常々名を聞ぬいて、紀の國屋の小春に天満の大じんとは治兵衛めに極つた。噂の爲には甥なれど、こちは他人、娘が大事。茶屋者請出し女房は茶屋へ賣をらふ。著類著そげに疵付られぬ間に取返してくれふと、沓脱半分下りられしを、そつ〜しい神妙にも成ことを、明さ暗さ聞届て上のことと押宥め、此孫右衛門同道した。孫右衛門の咄しには今日昨日の治兵衛でない。曾根崎の手も切れ本人間の上々と、聞ば跡からはみかへる、そもいかなる病ぞや。そなたの父御は伯母が兄、最愛や光譽だうせい往生の枕を上、一簪なり甥なり、治兵衛が事頼むと

伯 母 いやんな云やんな。夕部十夜の念佛に講中の物語、曾根崎の茶屋紀の國屋の小春といふ白人に、天満の深い大じんが外の客を追退、直に其大臣が今日明日に請出すとの沙汰。賣買高い世の中でも、金とたはけは澤山なといろ〜の評判。こちの親父御左衛門殿常々名を聞ぬいて、紀の國屋の小春に天満の大じんとは治兵衛めに極つた。噂の爲には甥なれど、こちは他人、娘が大事。茶屋者請出し女房は茶屋へ賣をらふ。著類著そげに疵付られぬ間に取返してくれふと、沓脱半分下りられしを、そつ〜しい神妙にも成ことを、明さ暗さ聞届て上のことと押宥め、此孫右衛門同道した。孫右衛門の咄しには今日昨日の治兵衛でない。曾根崎の手も切れ本人間の上々と、聞ば跡からはみかへる、そもいかなる病ぞや。そなたの父御は伯母が兄、最愛や光譽だうせい往生の枕を上、一簪なり甥なり、治兵衛が事頼むと

さ 語 假令私が佛でも男が茶屋者請出す、其鼻屑せふはづがない。是計は此方の人に微塵もつそはない、母様證據に私が立ます

伯 母 切はそふか

伯 母 切はそふか

伯 母 ム、物には念を入ふこと。先々嬉敷。とてもに心おち付ため、かたむくろの親父殿、疑ひの念なきやうに、誓紙書すが合點か

伯 母 ム、物には念を入ふこと。先々嬉敷。とてもに心おち付ため、かたむくろの親父殿、疑ひの念なきやうに、誓紙書すが合點か

伯 母 ム、物には念を入ふこと。先々嬉敷。とてもに心おち付ため、かたむくろの親父殿、疑ひの念なきやうに、誓紙書すが合點か

治 語 何が切千枚でも仕らふ

伯 母 いや〜満足

伯 母 いや〜満足

孫 語 則道にて求めし

孫 語 則道にて求めし

孫 語 則道にて求めし

語 比翼の誓紙引かへ、今は天罰起請文、小春に縁切思ひ切。偽り申にをひては、上は梵天帝釋、下は四大の文言に、佛ぞろへ神ぞろへ、紙屋治兵衛名をしつかり、血判をすへてさし出す。

語 比翼の誓紙引かへ、今は天罰起請文、小春に縁切思ひ切。偽り申にをひては、上は梵天帝釋、下は四大の文言に、佛ぞろへ神ぞろへ、紙屋治兵衛名をしつかり、血判をすへてさし出す。

語 比翼の誓紙引かへ、今は天罰起請文、小春に縁切思ひ切。偽り申にをひては、上は梵天帝釋、下は四大の文言に、佛ぞろへ神ぞろへ、紙屋治兵衛名をしつかり、血判をすへてさし出す。

さ 語 ア、母様伯父様のお蔭で、私も心落付、子中なしてもついに見ぬ堅め事。皆悦んで下さんせ

さ 語 ア、母様伯父様のお蔭で、私も心落付、子中なしてもついに見ぬ堅め事。皆悦んで下さんせ

さ 語 ア、母様伯父様のお蔭で、私も心落付、子中なしてもついに見ぬ堅め事。皆悦んで下さんせ

親方から遣るならば、物の見事に死んで見しよと、度々詞を放ちしが、是見や退いて十日も立ぬうち、太兵衛めに請出さるる腐り女の四ツ足めに、心はゆめ／＼残らね共、太兵衛めがいんげんこき、治兵衛身代往著ての、金の手詰つてなんどと、大坂中を觸廻り、問屋中のつき合にも、面をまぶられ生恥かく、胸が裂る身が燃る。エ、口惜い無念な。熱い涙血の涙、ねばい涙を打越へ熱鐵の涙が溢るる

立ぬ。まづこなさん早ふ往てどぶぞ殺して下さるな
語　り　と、夫に縋り泣沈む。
治　　夫とても何とせん。半金も手附を打、繁ぎ取て見る計。小春が命は、新銀七百五十匁呑さねば、此世に止むる事ならず。今の治兵衛が四ツ三貫匁の才覺、打みしやいでも何處から出る

語　り　と、いへ共始終さし俯きしく／＼泣て居たりしが、
治　　手付渡して取とめ、請出して其後、圍ふてをくか、内に入るにしてから、そなたは何と成ことぞ
語　り　と、云れたはつと行當り、
さ　　ん　アツアそふじや。ハテ何とせふ。子供の乳母か飯焚か、隠居成共しませふ

語　り　と、立て筆筒の小ひきだし、明て惜氣もなひませの、紐付袋押開き投出す一包、治兵衛取上、

治　　余りに冥加恐しい。此治兵衛には親の罰天の罰佛神の罰は當らず共、女房の罰一つでも將來はよふない筈。免してたもれ

語　り　と、我置ぬ金に目覺る計なり。
治　　ヤ金か。然も新銀四百匁、こりやどぶして

語　り　と手を合せ、口説歎けば、
さ　　ん　勿躰ない、夫を拜むことかいの。手足の爪をはなしても、皆夫への奉公。紙問屋の仕切銀、何時からか著類を質に間をわたし、私が筆筒は皆明殺。夫惜いとも思ふにこそ。何いふても跡へんでは返らぬ。サア／＼早ふ小袖も着かへて、につこり笑ふて往かしやんせ

語　り　と大ひき出の錠明て、筆筒をひらりと飛八丈、けふ縮緬の明日はない夫の命しら茶うら。娘のお末が両面の、紅絹の小袖に身を焦す。是を曲ては勘太郎が、手も綿もない袖なしの、羽織も交て郡内の仕末して著ぬ淺黄裏、黒羽二重の定紋丸に蔦の葉の、のきも退れもせぬ中は、内裸でも外錦、男かざりの小袖迄、さらへて物數十五色。内ばに取て新銀三百五十匁、よもや貸ぬといふことは、無い物迄も有顔に夫の恥と我義理を、一つに包む風呂敷の、中に情を籠にける。

語　り　と、下に郡内黒羽二重、島の羽織に紗綾の帯、金ごしらへの中脇指、今宵小春が血に染とは、佛や知召さるらん。

語　り　と、騷げば夫も敗亡し、

治　　三五郎爰へ

語　り　と、騷げば夫も敗亡し、

語　り　と風呂敷包肩に負せて供につれ、銀も肌身にしつかと付、立出る門の口、

語　り　と、騷げば夫も敗亡し、

治　　治兵衛は内にお居やるか

語　り　と、騷げば夫も敗亡し、

語　り　と、毛頭巾取て入を見れば、南無三寶舅五左衛門。

語　り　と、騷げば夫も敗亡し、

語　り　と、騷げば夫も敗亡し、

語　り　と、騷げば夫も敗亡し、

語　り　と、騷げば夫も敗亡し、

語 り と、夫婦は轉動狼狽ゆる。三五郎が負たる風呂敷もぎ取て、どつかと坐り尖り聲、

五 女郎下にけつからふ。智殿是は珍らしい。

上下著飾り脇指羽織 天晴よい衆の金遣ひ。紙屋とは見へぬ、新地へのお出か、御精が出ます。内の女房いらぬ物。おさんに暇遣りや、連に來た

語 り と、口に針有苦い顔。治兵衛はとかふの言句も出ず、

さ ん 父様今日は寒いによふ歩かしやんす。先お茶一ツ

語 り と茶碗をしほに立寄つて、

さ ん 主の新地通ひも最然母様孫右衛様お出なされて、段々の御異見熱い涙を流し、誓紙を書ての發起心。母様に渡されしがまだ御覽なされぬか

五 ヲ、誓紙とは此ことが

語 り と懐中より取出し、

五 阿房狂ひする者の起請誓紙は、方々先々書出し程書ちらす。合點が往かぬと思ひく來たれば案の如く、此さまでも梵天帝釋か。此手間で去状書け

語 り と、ずんく引裂て投捨てたり。夫婦はあつと顔を見合せあきれて詞もなかりしが、治兵衛手をつき頭をさげ、

治 御立腹の段尤共お申すは以前の事。今日

日の只今より何事も慈悲と思召し、おさんに添せて下されかし。譬ば治兵衛乞食非人の身と成、諸人の箸の余りにて身命は繁く共、おさんは急度上にすへ、憂め見せず辛いめさせず、添ねばならぬ大恩有、其譚は月日も立、私の勤方身上持直し、お目に懸れば知るること。夫迄は目を塞いでおさんに添せて給はれ

語 り と、はらはらこぼす血の涙、疊に喰付佗ければ、

五 非人の女房には猶ならぬ、去状書く。お

さんが持参の道具衣類、數改めて封つけん

語 り と、立寄ば女房あはて、

さ ん 著物の數は揃ふてあり、改めるに及ばぬ

語 り と駈塞がれば、突退ぐつと引出し、

五 コリヤどぶじや

語 り 又引出してもちんからり。有たけこたけ、引出しても、繼ぎれ一尺あらばこそ。葛籠長持衣裳櫃、是程からになつたかと、舅は怒の眼玉もすはり、夫婦が心は今更に、明て悔敷浦島の、火燧蒲團に身を寄せて、火にも入たき風情なり。

五 此風呂敷も氣遣

語 り と引ほどき取散し、

五 さればこそく、是も質屋へ飛すのか。ヤイ治兵衛、女房子共の身の皮はぎ、其金でおやま狂ひ。いけどう掏賊め。女房共は伯母甥なれど、此五左衛門とはあかの他人。損をせふよしみがない。孫右衛門に斷り兄が方から取返す。サア去状く

語 り と、七重の扉八重の鎖、百重の圍みは遁る共、遁れがたなき手詰の段。

治 ヲ、治兵衛が去状筆では書ぬ是御覽せ。おさんさらば

語 り と脇指に手をかくる。縋り付て

さ ん なふ悲しや。父様身に誤りあればこそ段々の佗言、あんまり利運過ました。治兵衛殿こそ他人なれ、子共は孫可愛ふは御座らぬか。わしや去状は受取ぬ

語 り と、夫に抱付聲を上、泣叫ぶこそ道理なれ。

五 よいく去状いらぬ。女郎こい

語 り と引立る。

さ ん いや私や往かぬ。飽もあかれもせぬ中を、

何の恨に晝日中、女夫の恥は晒さぬ

語 り と泣佗れ共聞入ず。

五 此上に何の恥。町内一ぱい喚いて行

語 り と引立ればふり放し、小腕とられよろくと、よろめく足の爪先に可愛やはたと行あたる、二人の小共が目を感じ、

小 共 大事の母様なぜ連て行、祖父様め。今から誰と寐よふぞ

語 り と慕ひ歎けば、

さ ん ヲ、いとしや、生れて一夜もかが肌を放さぬもの。晩からは父様と寐しやや。二人の子共が朝ぶさ前忘れず、必くわ山吞せて下され。なふ悲しや

語 り と、いひ捨る。跡に見捨る子を捨る、藪に夫婦の二股竹永き別れと

三重

下之卷

語 り 戀なさけ愛を瀨にせん蜷川、流るる水も行通ふ、人も音せぬ丑滿の、空十五夜の月冨て、光りは暗き門行燈、大和屋傳兵衛を一字書。眠りがち成拍子木に、番太が足取千鳥足、こよぎくも聲更た

り。駕籠の衆いかふ更たの上の町から下女子、迎ひの駕籠も大和屋の、潜くはら／＼つと入、

治　り　と、渡せば取てしつかどさし、是さへあれば千人力。もふ休みやれ

語　り　と立歸る。

傳　り　追付お下りなさりませ。よふ御座りま

語　り　もそこ／＼に、跡は樞を／＼つとりと、物音もなく鎮まり。治兵衛はつとと去ぬる顔。又引かへす忍び足、大和屋の戸に縋り、内を覗いて見る内に、間近き人影びつくりして、向ひの家の物影に過る間暫し身を忍ぶ。弟故に氣を碎く、粉屋孫右衛門

孫　は先にたち、跡に丁稚の三五郎が、背中にもつゝの勘太郎を連れ、行燈目あてに駈來たり、大和屋の戸を叩き、

語　り　ちよつと逢せて下され

孫　ちと物問ませ。紙屋治兵衛は居ませぬか。

語　り　と呼はれば、一扱は兄きと治兵衛は身動きもせず、猶忍ぶ。内から男の寐はれ聲、

傳　り　治兵衛はまちつと先に、京へのぼるとてお歸りなされた。爰には御座らぬ

語　り　と、重て何の音なひも、涙はら／＼孫右衛門、

孫　歸らば道で逢そな物。京へとは合點がゆかぬ。ア、氣遣ひで身がふるふ。小春をつれては行ぬか

語　り　と、胸にきつくり横たはる、心苦しきこたへかね、又戸を叩けば、

男　夜更て誰じゃ。もふ寐ました

孫　御無心ながらま一度お尋ね申たい。紀伊の國屋の小春殿は、お歸りなされたか。もし治兵衛と連立て行はなされぬか

男　ヤヤ何じゃ小春殿は二階に寐てじゃ

孫　ア先心が落付た。心中の念はない。何處にかがんで此苦をかける。一門一家親兄弟が、片唾を吞で臍腑を揉とはよも知るまい。舅の恨に我身を忘れ、無分別も出よふか、と異見の種に勘太郎を連れて尋るかひもなく、今迄逢ぬは何ごと

語　り　とほろ／＼涙の一人言、隠るる間の隔てねば、聞へて治兵衛も息を詰、涙吞込計なり。

孫　ヤイ三五郎、阿房めが夜る／＼／＼つせる所、外には知らぬか

語　り　といへば、阿房は我名ぞと心へて、

三　知て居れど爰では恥かしうていはれぬ

孫　知て居るとはサア何處じゃ。云て聞せ

三　聞た跡で叱らしやんな。毎晩ちよ／＼行

孫　所は、市の側の納屋の下

孫　大だはけめ、夫を誰が吟味する。サアこい裏町を尋ねて見ん。勘太郎に風ひかすな。ごくにも立ぬ父めを持って、可愛や冷たいめをするな。此冷たさで仕廻ばよいが、ひよつと憂めは見せまいか

語　り　憎や／＼の底心は不便／＼の裏町を、いざ尋んと行過る、影隔たれば駈出て、跡懐かしげに伸上り、心に物を云はせては、

治　十悪人の此治兵衛、死に次第共捨置れず、跡からあと迄御厄介。勿躰なや

語　り　と手を合せ、伏拜み／＼、

治　猶此上のお慈悲には、子共がことを

語　り　と計にて、暫し涙に咽びしが、

治　兎ても覺悟を極しうえ、小春や待ん

下　女　小春様はお泊しや。駕籠の衆直に休ましやれ。ア、いひ残した是花車さん、小春様に氣を付て下さんせ。太兵衛様へ身請がすんで、金請取たりや預かり物。酒過させて下んすな

語　り　と、門の口から明日待ぬ、治兵衛小春が土に成、種時ちらして歸りける。茶屋の茶釜も夜一時、休むは八ツと七ツとの間にちら付短檠の、光も細く更る夜の、川風寒く霜みてり。

傳　り　まだ夜が深い送らせましよ。治兵衛様のお歸りじゃ、小春様起しませ。夫呼ませ

語　り　は亭主が聲。治兵衛潜をくはさとあけ、

治　コレ／＼傳兵衛、小春に沙汰なし。耳へ入しは夜あけ迄くられる。夫故よふ寐させて抜て往ぬる。日が出てから起していなしや。我等今から歸ると直に、買物の爲京へ上る。大分の用なれば、中拂ひの間にあふ様に歸るは不定。最前の金でそなたの算用合も仕廻、河庄が所へも後の月見の拂といふて、四ツ百五十匁請取つて給らふし、と福島西悦坊が佛壇買た奉加、銀一枚回向しやれと遣つてたも。其外に懸り合は、ハア夫よ／＼、磯市が花銀五、是計じゃ仕廻て寐やれ。さらば／＼戻つて逢ふ

語　り　と、二足三足行より早く立歸り、

治　脇指忘れたちやつと／＼。なんと傳兵衛、

傳　町人はここが心易い。侍なれば其儘切腹するであろの

傳　我ら預かつて置てとんと失念。小刀も揃ふた

語

り と大和屋の、潜の透間さし覗けば、内にちら付人かげは、小春じやないか。待つとしらせの合圖の咳、エヘンくかつちく、ゑへんに拍子木打ませて、上の町から番太郎が、くるくたぐる風の夜は、せきく廻る火用心。こよざくも人忍ぶ、我には辛き葛城の、神隠れして遣り過し、透を窺ひ立寄ば、潜内からそつと明く。

小春か

待てか。治兵衛様早ふ出たい

語

り と氣をせけば、せく程廻る車戸の、明るを人や聞付んと、しゃくつてあくればしゃくつて響き、耳に轟く胸の中。治兵衛が外から手を添ても、心震ふに手先も震ひ、三分四分五分一寸の、先の地獄の苦みより、鬼の見ぬ間と漸に、明て嬉しき年の朝小春は内を抜出て、互ひに手を取かはし、北へ行るか南へか。西か東か行末も、心の早瀬蜷川、流るる月に逆らひて、足をはかりに

三重

名づりの橋づくし

語

り 走り書、謠の本は近衛流、野郎帽子は若紫悪所狂ひの身の果は、かくなり行と定まりし、釋迦の教も有ことが、見たし憂身の因果經、明日は世上の言草に紙屋次兵衛が心中と、仇名散り行櫻木に、根彫葉ほりを繪双紙の、板摺る紙の其中に、有共しらぬ死神に、誘はれ行も商賣に、疎き報と觀念も、とすれば心ひかされて、歩み悩むぞ道理成。此は十

月十五夜の、月にも見へぬ身の上は、心の闇の印かや。今置霜は明日消る、はかなき誓の夫よりも、先へ消行闇の内、いと可愛として寝し、移香も何と

冷泉流の蜷川、西に見て朝夕渡る此橋の、天神橋は其昔、菅丞相と申せし時、筑紫へ流され給ひしに、君を慕ひて太宰府へ、たつた一飛梅田橋、跡老松の緑橋、別れを歎き悲しみて、跡にこがるる櫻橋、今に咄しを聞渡る、一首の歌の御威徳。

治

斯る尊き荒神の、氏子と生れし身を持って、

そなたも殺し我も死ぬ、元はと問へば分別の、あのいたいな貝殻に、一杯もなき蜷橋。短かき物は我々が歌此世の住居秋の日よ、十九と廿八年の、今日の今宵を限りにて、二人の命の捨所。爺と婆との末迄も、まめで添はんと契りしに、丸三年も名染いで、此災難に大江橋。あれみや浪花小橋から、舟入橋の濱傳ひ。是迄來れば来る程は、冥途の道の道が近付

語

り と、歎けば女も縊り寄り、

小

もふ此道が冥途か

語

り と、見交す顔も見へぬ程、落る涙に堀川の、橋も水にや浸るらん。

治

北へ歩めば我宿を、一目に見るも見返らず。子共の行衛女房の、哀も胸に押包み、南へ渡る橋柱、數も限らぬ家々を、いかに名付て八軒家。誰と伏見の下り舟、著ぬ内に

語

り と道急ぐ。

此世を捨て行身には、聞も恐ろし天満橋、歌淀と大和のニア川を、一ツ流の大川や、水と魚とは連て行。我も小春と二人連、一ツ刃の三ツ瀬川、手向の水に受たやな。

小

何か歎かん此世でこそば添ず共。未來はい

ふに及ず、今度のく、つと今度の其先の世迄も夫婦ぞや。一ツ蓮の頼みには、一夏に一部夏書せし、大慈大悲の普門品、

妙法蓮華京橋を、

地藏和讃越れば到る彼岸の、

玉の臺に法をへて、佛の姿に身御成橋、衆

生済度がままならば、流の人の此後は、絶て心中せぬやうに、守りたいぞ

語

り と及びなき、願ひも世上のよまひ言、思ひやられて哀れなり。野田の入江の水煙り、歌山の端白くほのくと、あれ寺々の金の聲、こくく

かふしていつ迄か、とても存らへ果ぬ身を、

最期急がん此方へ

語

り と手に百八の玉の緒を涙の玉に操ませて、南無あみ鳥の大長寺、藪の外面のいささ川、流れ漲る樋の上を、最期所と著にける。

治

なふいつ迄うか、歩みても、爰そ人の死に場とて、定まりし所もなし。いざ爰を往生場

語

り と、手を取土に座しければ、

小

さればこそ死に場は何處も同じこと云ながら、わたしが道々思ふにも、一人が死に顔並べて、小春と紙屋治兵衛と心中と沙汰あらば、おさん様より頼みにて、殺して呉るなこるすまい、挨拶切と取替せし其文を反古にし、大事の男を唆しての心中は、さすが一座流れの勤めの者、義理しらず偏り者と、世の人千人万人より、おさん様一人のさげしめ、恨み妬みもさぞと思ひ遣り、未來の迷ひは一つ。わたしを爰で殺して、こなさん何處ぞ所をかへ、ついと側で

語

り とうちもたれ、くどけば共にくどき泣

治 ア愚痴な事ばかり。おさんは舅に取りかや

され、暇を遣れば他人と他人。離別の女になんの義理。道すがらいふ通り、今度のくずんと今度の、先の世迄も女夫と契る此二人。枕を並べ死るに、誰が誘ふ誰が妬む

小 サア其離別は誰がわざ。わたしよりもこなさん猶愚痴な。身躰があのお世へ連立か。所々の死にをして、譬へ此からだは鳶鳥につつかれても、二人の魂付纏はり、地獄へも極樂へも連立て下さんせ

語 り と、又伏沈み泣ければ、

治 ヲ、夫よく、此からだは地水火風、死れば空に歸る。五生七生朽せぬ夫婦の、魂放れぬ印合點

語 り と、脇指すはと抜はなし、元結きはより我

治 是見や小春。此髪の有内は紙屋治兵衛と云ふおさんが夫。髪切たれば出家の身、三界の家を出妻珍寶不隨者の法師。おさんといふ女房なければ、おぬしが立る義理もなし

語 り と、涙ながら投出す。

小 ア、嬉しむござんす

語 り と小春も脇指取上、洗ひつ漉つ撫付し、酷や惜げも投島田、はらりと切つて投捨る。枯野の芒夜半の霜、共に亂るる哀れさよ。

治 浮世を遁れし尼法師、夫婦の義理とは俗の昔。迎もの事にさつぱりと、死場もかへて山と川、此樋の上を山となぞらへ、そなたが最期場。我は又此流れにて縊り、最期は同じ時ながら、捨身の品も所も替て、おさんに立抜く心の道。其抱帯此方へ

語 り と、若紫の色も香も、無常の風に縮緬の、

此世あのおの二重まはり、樋の粗木にしつかと括り、

先を結んで狩場の雉子の、妻故我も首しめくる畏結。我と我身の死拵へ、見るに目もくれ心くれ、

小 こなさん夫で死なしやんすか。所を隔て死ぬれば、側に居るも少の間。爰へく

語 り と手を取合、

小 刃で死ぬるは一ト思ひ。さぞ苦痛なされつと、思へばいとしいく

語 り と、とどめかねたる忍泣。

治 首くくるも喉つくも、死ぬるに愚の有物か。

よしな事い事に氣をふれ、最期の念を亂さず共、西へくへ行月を、如來と拜み目を放さず。只西方を忘りやるな。心残りの事あらばいふて死にや

小 何にもないく。こなさん定てお二人の子達の事が氣にかかる

治 アレひよんな事いひ出して又泣しやる。父親が今死ぬる共、何心なくすやくと、可愛や寐顔見るやうな。忘ぬは是はつかり

語 り とかつぱと伏て泣しづむ、聲も争ふ群鳥、啼をはなれて鳴聲は、今の哀れを問ふやとて、いとど涙を添にける。

治 なふあれを聞や。二人を冥途へ迎ひの鳥、牛王の裏に誓紙一枚書たびに、熊野の鳥がお山にて、三羽つつ死ぬると、昔より云傳へしが、我とそなたが新玉の、年の始に起請の書初め。月の始月頭、書し誓紙の数々、其度毎に三羽つつ、殺せし鳥は幾許ぞや。常には可愛く聞、今宵の耳へは其殺生の恨の罪、むくひく聞ゆるぞや。報ひとは誰ゆへぞ、我故辛き死をとぐる。ゆるしてくれ

語 り と抱き寄れば、

小 いやわし故

語 り と締寄て、顔とくをうち重ね、涙に閉る

鬢の髪、野邊の嵐に冰けり。後に響く大長寺の鐘の聲、南無三寶長き夜も、夫婦が命短き夜と、早明渡る晨朝に、最期は今ぞと引寄て、跡迄残る死顔に、泣顔残すな残さじと、につと笑顔のしろじろと、霜に凍えて手も慄ひ、我から先に目もくらみ、刃の立どもなく涙。

治 ア、せくまいく

小 早ふく

語 り と女が勇むを力草、風誘ひ來る念佛は、我に勤むる南無阿彌陀佛、彌陀の利刃とくつと刺され、引すへてものり返り、七ツ顛八倒こはいかに、切ツ先咽の笛を外れ、死にもやらざる最期の業苦、共に亂れて苦みの、氣を取直し引寄て、鐔元迄さし通したる一刀、剝る苦しき曉の、見果ぬ夢と消果たり。頭北面西右脇臥に羽織打著せ、死骸を繕ひ、泣て盡せぬ名残の袂、見捨て抱帯を手繰寄せ、首に鬘を引掛る。寺の念佛も切回向、有縁無縁乃至法界、平等の聲を限りに樋の上より、

治 一蓮托生南無阿彌陀佛

語 り と踏はづし、暫し苦むなり瓢、風に揺るる如くにて、次第に絶る呼吸の道、いきせきとむる樋の口に、此世の縁は切果たり。朝出の漁夫が網の目に、見付て、

漁 夫 死んだやれ死んだ。出合く

語 り と聲々に、云廣めたる物語。直に成佛得脱の、誓ひの網島心中と、目ごとに涙をかけにけり。

